顕在的・潜在的シャイネスと他の諸変数の関係

—文化的自己観、拒否回避欲求を中心に—

○稲垣 勉¹ 澤海 崇文² 澄川 采加¹

(¹鹿児島大学 ²流通経済大学)

Key words: 顕在的シャイネス, 潜在的シャイネス, 文化的自己観, 拒否回避欲求

目 的

人々の中には「恥ずかしがり屋」「はにかみ屋」といった言葉で表現されるように、対人場面で抑制されたような感覚を持つ人もいる。こうした人が持つ特性は「シャイネス」と呼ばれ、シャイネスは「対人場面において生じ、社会的不安と对人的抑制という特徴を持つ、情動のかつ行動的な症候群(相川, 1991)」と定義されている。

これまでシャイネスの測定には自己報告式の尺度が用いられてきた(e.g., 相川, 1991; 鈴木・山口・根建, 1997)。しかし、近年はImplicit Association Test(以下 IAT; Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998)を用いて潜在的な態度や特性を測定する流れがあり、シャイネスも例外ではない(藤井・相川, 2013; Sawaumi, Inagaki, & Aikawa, 2019 など)。

Asendorpf, Banse, & Mücke (2002) を端緒として、潜在的シャイネスの測定に IAT が用いられるようになって 18 年が経過しているが、一連の研究には、行動指標や他者評定との関連を検討したもの(Asendorpf et al., 2002; 相川・藤井, 2011 など)や、他の特性との相関関係を検討したもの(藤井・澤海・相川, 2015 など)がある。特に後者について、シャイネス IAT の得点と他の諸変数との関連について、これまで外向性とは弱から中程度の負の相関(相川・藤井, 2011)、攻撃性の下位尺度である身体的攻撃や言語的攻撃とは弱い負の相関、主観的幸福感とは正の相関(藤井他, 2015)を示したほか、相川(1991)の特性シャイネス尺度との間には、複数の研究において、有意でない弱い正の相関が見られている(相川・藤井, 2011; 藤井他, 2015 など)。

本研究は、顕在的・潜在的シャイネスと他の諸特性との相関関係をさらに検討するため、顕在的・潜在的シャイネスと文化的自己観、拒否回避欲求との関係について、性差も含めて検討した。関係を検討する変数の選択は、顕在的シャイネスとの関連が予想されるものを参考に行った。

方 法

参加者 大学生 58 名(男性 24 名, 女性 33 名, 性別無回答 1 名。平均年齢 19.25 歳, $SD = 1.09$)を対象とした。

質問紙 本研究では、(a)特性シャイネス尺度(相川, 1991) 16 項目、(b)相互協調的自己観・相互独立的自己観尺度(高田, 1999)それぞれ 6 項目、4 項目、(c)拒否回避欲求尺度(小島・太田・菅原, 2003) 9 項目、(d) 2 項目版自尊感情尺度(箕浦・成田, 2013)、(e)シャイネス IAT 日本語版(相川・藤井, 2011)を用いた。(a)～(d)はいずれも 5 件法を用いた。本研究のデータは、別の目的から介入効果を検討した稲

垣・澤海・澄川(2020)と一部重複している。

手続き 講義前後の空き時間などを利用して参加者に質問紙を配布し、(a)～(d)の各尺度への回答を求めた。その後、PC を用いた課題への参加を依頼し、Inquisit Web License を用いて(e)のシャイネス IAT への回答を求めた。

結果 および 考察

データの得点化 各尺度について、逆転項目のある項目は逆転処理を行い、合算平均得点を求めた。IAT は D 得点(Greenwald, Nosek, & Banaji, 2003)を求めた。いずれも得点が高いほど、当該尺度名の傾向が強いことを示す。

各尺度間の関係 各尺度得点の相関係数と記述統計量を求めた(Table1)。その結果、特性シャイネス尺度得点とシャイネス IAT 得点は、相互協調的自己観・相互独立的自己観、拒否回避欲求の各尺度得点と同程度・同方向の相関係数を示した。また、特性シャイネス尺度得点とシャイネス IAT 得点の相関係数も正の値で、有意であった。

Table1 各尺度の相関係数および記述統計量 ($N = 58$)

	2	3	4	5	6	α	M	SD
1 特性シャイネス	.29 *	.35 **	-.59 **	.37 **	-.20	.88	3.11	0.65
2 シャイネス IAT	—	.28 *	-.40 **	.39 **	-.03	—	-0.23	0.45
3 相互協調的自己観		—	-.60 **	.70 **	-.09	.74	3.86	0.57
4 相互独立的自己観			—	-.69 **	.36 **	.73	2.84	0.70
5 拒否回避欲求				—	-.35 **	.86	3.68	0.64
6 自尊感情					—	.80	3.08	0.87

** $p < .01$, * $p < .05$.

続いて、男女別に相関係数と記述統計量を求めた(Table2)。各尺度の得点について、性差はいずれも有意ではなかった($ts < 1.60$, $ps > .11$)。しかし、相関係数のパターンは男女で異なっており、特に女性においてのみ、特性シャイネスとシャイネス IAT との相関係数が有意であった。従来、シャイネスを表出することは社会的にネガティブな評価を受ける可能性があるとされていたが(Zimbardo, 1977)、近年は本邦においてシャイネスに対するイメージはポジティブに変容している(藤井・澤海・相川, 2016)。仮に本邦において女性がシャイであることを隠さなくてもよいという風潮があるとすれば、社会的な望ましさの影響を受けずに、自己報告にてシャイネスを報告していると考えられる。その結果、シャイネス IAT との有意な相関がみられたのかもしれない。ただし、この点は推測の域を出ないため、今後さらに検討すべきである。

付 記

本研究は JSPS 科研費 17K13902 の助成を受けた。

(Tsutomu INAGAKI, Takafumi SAWAUMI, Ayaka SUMIGAWA)

Table2 各尺度の相関係数および記述統計量 (男女別)

	1	2	3	4	5	6	α	M	SD
1 特性シャイネス	—	.22	.28	-.52 **	.37	-.17	.88	3.10	0.66
2 シャイネス IAT	.35 *	—	.17	-.32	.10	.04	—	-0.34	0.45
3 相互協調的自己観	.41 *	.37 *	—	-.66 **	.81 **	-.28	.61	3.95	0.48
4 相互独立的自己観	-.64 **	-.42 *	-.59 **	—	-.59 **	.38	.66	2.84	0.67
5 拒否回避欲求	.38 *	.59 **	.66 **	-.74 **	—	-.40	.82	3.69	0.60
6 自尊感情	-.20	-.06	.00	.36 *	-.36 *	—	.80	3.08	0.84
α	.89	—	.80	.77	.88	.80			
M	3.11	-0.15	3.80	2.84	3.69	3.11			
SD	0.66	0.45	0.63	0.74	0.68	0.90			

** $p < .01$, * $p < .05$. 注) 右上は男性 ($N=24$)、左下は女性 ($N=33$)。